

情報保障者分科会 「大学における情報保障の専門性 ー手話通訳・ノートテイク・PC通訳ー」

「授業による支援者養成の現状」

話題提供者：広島大学障害学生支援のためのボランティア活動室 田中芳則

1 支援者養成の授業の位置づけ

広島大学では聴覚障害学生への情報保障を授業の一環として行っている。授業名は「障害学生支援ボランティア実習 A,B(前期・後期)」(以下、実習)であり、教養教育科目である。単位修得済の学生には引き続き、障害学生支援のために単位不要での登録をお願いしている。実習に入る前、実習ガイダンスを前期後期各4回開催し、その際にノートテイク講習会(1時間)を合わせて行っている。その後履修登録した学生は、実習の中でいろいろな支援技術について学ぶ。その支援技術の1つがノートテイクあるいは、PC通訳である。ノートテイク・PC通訳については、知識、要約技術、記述技能など約15回のスケジュールで教授している。

2 情報保障実践への対策

ノートテイクでは言葉を要約して1分間に70文字を記述できること、またPC通訳では1分間に120文字をキー入力できることを目標にし、実習を受講した学生(以下、実習生)が記述・入力練習や要約方法といった技能を身につける。実習生は前期あるいは後期の半期の間にテイクとして最低限必要な技能を身につけ、基本的に次の半期で実際の派遣に出ることとなる。なお実習生は、より実践に近い練習として、2人1組で模擬授業によるノートテイク、PC通訳(機器の設置を含む)も実施している。この練習では、情報保障の技術面だけでなく、聴覚障害学生、授業担当教員との顔合わせや常識的なマナーについても確認して行っている。

3 支援活動の単位化のメリット・デメリット

この支援活動は授業の一環であり、実習生は技能を身につける練習や実際に聴覚障害学生への情報保障を行うことで単位を修得できる。全学体制のもとで大学側は、これにより恒常的に支援者を確保することが可能となる。また聴覚障害学生にとっては、自分で支援者を探す手間がないこと、大学側が確保してくれているという安心感につながっている。しかし一方で、授業は任意に履修登録をしてくれる学生がいて成立するものであり、学期によって学生数にばらつきがある。履修登録学生数が少ない時には派遣できる人数も制限され、聴覚障害学生が希望する授業すべてに情報保障ができない場合も出てくるが、幸い現時点で、そのような事態に陥ったことはない。

4 支援者養成の実現に向けて

福祉系大学では支援者を育成する授業として、実習と同様の授業を単独で開講しても成立すると思われるが、福祉系学部のない大学や総合大学では実現するには困難を伴うであろう。

他の大学が広島大学と同様のシステムを採用、導入しようと考えた場合、ノートテイク・PC通訳の経験者が支援技術を学生に対して教えることと、その場限りではなく支援の上で、学生へのフォローアップができる体制の構築と専任教員の配置が必要であると考えている。